



今時の学生に「ファイナンス（金融論）」の処方箋を考える

経営学部 鈴木 誠



大学では理学部にて積年の趣味を満喫。その後、就職した金融機関ではシンクタンク部門に約10年在籍し、証券市場で取引されるJASDAQ指数を開発した。また、2度にわたる約10年は米国NYに駐在し、ノーベル賞受賞者と研究、9・11のテロに遭遇、米国IVYリーグの大学院を修了と様々な経験をしてきた。日本に帰任後から複数の大学で非常勤を兼務してきたが、縁あって2010年より文教大学に着任。キラキラと希望に燃える瞳の学生に出会うことが楽しみ。
(すずき まこと)

「授業がよくわからない」という声を聞くことが少なくない。異論もあろうが、サービス産業に位置する教育業界も「顧客満足度の最大化」を避けられない。しかし、「学生のレベル向上を図るための努力」が必ずしも「学生の満足度」に結びつかない点は悩ましいところである。本稿では当世の学生分析から得られた経験を活かした授業についてご紹介したい。

「Finance（ファイナンス：金融論）」というテーマの授業は、義務教育や高校で受ける機会がまずない科目である。だからといって、難解極まりないものではない。私が大学1年の際に受けた量子化学（Quantum Chemistry）という授業ではかなり面を食らった印象が今も残っている。一般教養科目なのに、テキストが英語で、最初の授業からシュレジンガー方程式を用いてはじまった。そして、期末テストが「Could "Fried Chicken" fly?」という冗談のような問題であったことしか記憶にはない。ただ、幸い単位は取得できたようだ。この量子化学から比べれば、私が今、学生に教えているファイナンスなど取るに足らないレベルだと感じている。しかし、残念なことに、どの大学においても学生はファイナンスの授業は難解だという印象を共通して持っているようである。なぜ、そのような印象をもってしまうのであろうか。

当世大学生気質①：「未知」を「既知」で解決しようとする姿勢の特性

勉強が不得意の学生の特徴として、すべてを自分の知識の範囲内で片づけたいという強い姿勢が垣間見られる。新しいことを学ぶのであるから、「知らなくて当然」、「間違えるのはあたりまえ」なのだが、こうしたことを「億劫」、「面倒」だと感じてしまうようだ。これは学問に向かい合う姿勢が形成されていないからと切り捨ててしまえば単純であるが、それでは顧客満足にはつながらない。どのようにその億劫さや面倒くささを解消するか。私の少ない経験に照らすと、概ね2つの方法があるように思う。一つは訓練によって解消する方法だ。端的に言うならば、わが国の（試験対策）勉強のように、問題の認識、類型化、解法の適用といった訓練を徹底することで、一定範囲の問題を解くことができるようになる。そうすると、問題に向き合う姿勢に変化が見られるようになる。特に、自分で

も出来るという自信が、面倒くさいという後ろ向きの気持ちをポジティブに転換することを支援するようだ。

もう一つは、「Curious mind (好奇心)」の醸成であると考えている。すべての分野とは言わないが自分の興味を持てる分野を持つことが成長する上で非常に有益と言われている。それは、必ずしも学問の教科である必要はない。しかし、小さな好奇心をどの科目でも有することは、学習効果の上で非常に有益であると考えられる。私が大学院に在籍していた際に指導教授から常に「Why」と自問せよと言いつけられた思い出がある。Whyの先にある答えを探す喜びを見つめることができれば、「億劫」の呪縛から解放されることになる。

残念なことだが、私の印象ではわが国における教育では、反復学習によって定型問題を解くことができる喜びを持たせる方が好奇心を育む教育より一般的のよう見受けられる。その結果、新しい知識を獲得しようという行動よりもこれまでの学習の成果で対応しようと無意識の行動が現れるのかもしれない。

当世大学生気質②：抽象化の理解が弱い学生たち

好奇心の養成は自立した学習に役立ちそうである。人生という長期的な展望に立てば、明らかに好奇心は有用である。しかし、短期間で学習成果を上げると考えると即効性があるとは言えなそう。ファイナンスとは経済学や経営学同様に社会科学に位置し、近年特に数理的なアプローチが不可欠となっている。数理的というと、数字や数式を用いてと考えがちだが、その背後の論理が極めて重要であることは言うまでもない。数式は論理の表現に過ぎない。初心者から初級向けファイナンスで利用する数式は、もっとも難解と不平の出る部分でも、高々、大学の数学、物理の入り口程度に過ぎない。そこには、どうやら理系と文系という日本的な区分にあぐらをかいて、文系に進学する場合は高校の途中から授業で数学を取らなくて構わないとなってしまうことが弊害のようだ。つまり、数式を用いた論理の積み上げという経験が途中でおろそかになってしまっていると看做すを得ない。これは、好きとか嫌いというレベルの問題ではなく、人間形成の上で極めて

重要なプロセスが欠如しているとみられる。この結果、論理的な思考の基礎固めができていないために、多くの学生は抽象化、一般化された教科書の理解に苦しみ、さらに、類似事例の分析ができないという迷路をさまようこととなってしまふような気がする。

ただし、文系といわれる学生でもかなりの幅があり、「いわゆる大学のレベル」と「受講する学生が抽象化を受け入れる能力」にはどうやら正の相関性があるらしいと他大学の授業を通して感じるに至った。そこで、抽象化の理解が弱い学生には同じ教科書を利用したとしてもなるべく身近で具体的な例を用いて説明することとしている。たとえば、金利計算の事例は、銀行にお金を預けた場合であるし、プリンシパル－エージェント問題については殿様と悪代官の例を用いて説明する。どちらも、当世学生気質①で述べたように、「既知」の延長にあるため理解しやすいというわけである。

知識に汎用性を持たせることが次のチャレンジ

大学の教員となって手探りでいろいろと試行錯誤してきたが、あつという間に5年が経過した。特に、近年は「授業が判りやすい」という声が文教大学でも聞こえるようになったことは嬉しいと感じている。しかし、一方で「授業ではわかるのに、いざテストになるとできない」と不平のような感想を述べる学生も存在している。

サラリーマン経験教員として、学生に備えて欲しい知識と技術は、社会にでて少なくとも数年程度は錆びないものである。それには知識の汎用化（授業でもわかるし、テストにも対応できる）という手続きが不可欠となる。抽象化を不得手とする学生に、如何に知識に汎用性を持たせるかが今後のチャレンジである。



鈴木ゼミ、社会科見学のひとコマ